

いじめについて考える

学校教育スタッフ 島田さつき

「自分の学級でいじめが起きた。」これは以前の自分にとってとてもショックなことでした。当時の私の「いじめ」という言葉に対する認識は「弱い者いじめ」とか「陰湿」とか、なにか特別なものを指すというイメージ。かつてのいじめの定義「一方的に」「継続的に」「深刻な苦痛」という要素がそのまま残っていたからです。しかし、現在の定義にはこれらの要素は含まれていません。

この法律において「いじめ」とは、児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童と一定の人間関係にある他の児童等が行う心理的または物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう。

（「いじめ防止対策推進法」第2条）

具体的には「冷やかしかからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる。」「軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたりする。」といったことも入ります。冷やかしかからかいなど、仲の良い友達同士の間でもしばしばあることです。「仲が良くて何を言っても許される」と思い込んでいても実際は言われた方は傷ついている…このようなことは日常生活でもよくあることではないでしょうか。

国立教育政策研究所によるいじめ追跡調査では約9割の子供たちが「仲間はずれ、無視、陰口」の経験があると答えています。それも加害被害どちらも、です。

「いじめの防止等のための基本的な方針（平成25年10月11日文科科学省）」の中にも『いじめは、どの子供にも、どの学校でも、起こりうるものである。とりわけ、嫌がらせやいじわる等の「暴力を伴わないいじめ」は、多くの児童生徒が入れ替わりながら被害も加害も経験する。』とあります。

以前から「人間関係のトラブルを乗り越えて成長する」という考え方があり、私自身も乗り越えて成長してきたと思っていました。しかし、よくよく考えてみると、仲の良い友達とのやりとりでも「本当は傷ついていた」ことは、できるだけ思い出さないよう心の奥深くに押し込め、乗り越えてはいないように感じます。たまたま当時深刻な状況にならなかつただけかもしれません。もちろん、当時は周囲も私自身も「いじめ」だとは思っていませんでした。

大人は子どもたちのトラブルに出会うと「自分にもそんな経験がある。よくあることだ。」「こういうことを経験して成長するものだ。」と大人になった「今」の気持ちで簡単に判断しがちですが、子どもたちはそんな先のことなど分かりません。

「自分の学級でいじめが起きた。」これは現在の定義では普通のことです。「どの学校においても、一定数のいじめが認知されるのが自然」なのです。（「平成26年度『児童生徒問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』の一部見直しについて」より）些細なものまで教え始めたらきりがないと声はありますが、深刻ないじめもはじめは些細なトラブルだったはずです。未然防止という視点で、よくある些細なトラブルについてもいじめではないかと疑い、どちらの子どもにも丁寧なケアをしていただきたいと思います。それが見ていてくれるという子どもたちの安心感につながるのではないのでしょうか。自分の反省も含め、学校が子どもたちの安心して過ごせる場所であることを願っています。

大人の学びが、未来をつくる。

益田市教育委員会 派遣社会教育主事 谷上 元織

7月、県内のある高校の生徒と対話する機会がありました。その高校では、地域全体を学びのフィールドとして、多様な大人と協働しながら課題解決型学習に取り組んでいます。対話を通して、多くの生徒が「こうしたい」とか「こう在りたい」という願いをもって主体的に学びに向かっていることを実感しました。

そこで、ある二人の生徒に「もし、あなたたちがリーダーやマネジメントする立場だとしたら、あなたたちのように主体的に行動しようとする人を育てるために、どんな場づくりをするか」と問うてみました。一人は県内から、もう一人は県外からそれぞれ異なる背景をもって進学した生徒たちでしたが、奇しくも同じようなことを答えました。

たくさん挑戦できる、または、失敗できる機会をつくることだと思います。任せてみて、失敗するかもしれないけど、それでも任せてやらせてみることだと思います。

私は、それを聞いて、思わずニヤリとしてしまいました。なぜかという、「高校生なのにすごい」という感覚は通り越し、「やっぱりそこだよな」と確信めいたものを感じたからです。そして、人の学びと成長にとっての肝ともいえるべき大切なことを仲間として共有できたような気がして、喜びがこみ上げてきました。

彼らが、主体性や当事者意識を育むものとして「たくさん挑戦できること」「失敗できる機会をつくること」を挙げたのはなぜなのかと考えました。どのような経験をすれば、そのように感じるのでしょうか。その時、私が思い出したのは、益田市でのつろうて子育て協議会などで話し合う地域の大人たちの姿でした。

通学合宿、放課後の自学教室・体験教室、野外体験活動など…。子どもたちの活動について話し合う時、本当に様々な意見が飛び交います。しかし、最終的な結論として、「ここは、手を出さずに見守ろう」「ここでは子どもたちに任せてみよう」と、子どもにゆだねることで一致する例が多くあります。大人が手出しをし過ぎない活動の中で、子どもたちはたくさんの失敗をします。野外活動であれば、ご飯がべちゃべちゃに炊けてしまったり、小さな傷をたくさんつくったりすることもあります。子どもたちは、失敗を通して、さまざまなことに気づき、学びます。人の話をしっかり聞くことの大切さ、仲間と一緒にものごとを進めていく難しさ、母親や父親に何でも頼ってきた自分の弱さ、そして、見栄えはよくなくても自分の力で何かをやり遂げる喜び…。

そのような経験をしながら育った人は、もし、自らが子どもの活動の場をつくる立場になった時、何を大切にするのでしょうか。私は、その答えが、冒頭で述べた高校生の姿と重なります。

今、時代は大きな変革の時にあります。これまで増加の一途を辿るばかりだった人口はすでに減少に向かい、20年後には今ある仕事の半分はなくなるともいわれています。まさに前例のない課題解決の時代を迎えています。そうした時代を生き抜く力を育むことが「教育」に求められています。そんな教育を推進するのは、それを担う大人の姿勢次第だと感じています。大人自身が、失敗する勇気をもって新しいことに挑戦し続ける姿を示していきたい、そんな決意をした7月でした。